

ネット上のコミュニティへの関与の違いが 他者とのつながり方に及ぼす影響

石川 真*

(平成26年9月30日受付；平成26年11月5日受理)

要 旨

本研究は、ソーシャルメディア上のコミュニティへの参加形態において、自ら発信して関与する（発信型）か、閲覧に留まる関与（傍観型）かの違いが当該コミュニティの認知や他者とのつながり方にどのような影響を及ぼすか、その傾向を探ることを目的とした。さらに社会的スキルの違いによる影響にも着目して分析した。

ソーシャルメディア上のコミュニティに対する認知については、発信型の方が傍観型よりも居心地感が良く、信頼感が高い傾向が示された。また、傍観型において、社会的スキルの高い者の方が低い者よりも当該コミュニティに対する平穏感の認知が高いことが示された。一方、他者とのつながり方については、発信型の方が傍観型よりも、親密性、共感性が高い傾向が示された。社会的スキルの傾向は、高い者の方が低い者よりも共感性や他者理解性が高い傾向が示された。

KEY WORDS

つながり relationship ソーシャルメディア social media コミュニケーション communication
社会的スキル social skill 情報モラル教育 information moral education

1 はじめに

これからの社会に求められる能力の概念については、数多く提唱されている。たとえば、ATC21s (Assessment & Teaching of 21st Century Skills) プロジェクトでは、21世紀型スキルとして、働くためのツールには、情報リテラシー、ICT、働く方法にはコミュニケーション、コラボレーションという能力を提唱している。また、OECDのDeSeCo (Definition and Selection of Competencies) プロジェクトでは、道具を相互作用的に用いる能力の一つに、テクノロジーを相互作用的に用いるスキルを挙げている。また、異質な人々からなる集団で相互に関わり合う能力も挙げている。日本国内に目を向けると、「生きる力」や情報教育において育成する情報活用能力が挙げられる。いずれも、知識基盤社会においては、ICTを活用する能力や、コミュニケーション能力を重要視していると捉えることができる。

このような中であって、Prensky (2001) はインターネットやコンピュータ、ビデオゲーム等のデジタル機器に生まれながらに接してきた若年層をデジタルネイティブ世代と呼んでいる。このデジタルネイティブ世代に該当する児童生徒の中には、ネットいじめ (cyber bullying) や、インターネット依存 (internet addiction) などの問題に直面している者もいる。戸部ら (2010) は、「気持ちの口に出せない」というコミュニケーション能力の低い者が高いインターネット依存傾向であることを明らかとした。ネットいじめやインターネット依存などの問題を未然に防ぐためには、こうした研究の知見を踏まえて、情報教育のねらいの一つである情報社会に参画する態度の育成、すなわち、情報モラル教育の取り組みが重要であると考えられる。

ところで、石川 (2013) は、情報モラル教育において、社会的スキルに目を向けていくことの重要性を指摘した。菊池 (2004) は社会的スキルを「対人関係を円滑にするスキル」と定義しているが、Segrin and Taylor (2007) は他者との良好な関係形成において社会的スキルが重要であることを示している。また、相川 (2010) は、他者との関係がより深まる過程において、各段階で必要な社会的スキルが適切に発揮されなければ、より親密になることができない点を指摘している。さらに、石川 (2012) は社会的スキルの高い者の方が相手からのメールの感情表現をより理解していることを明らかとした。したがって、インターネット依存やネットいじめなどの問題解決のみならず、ICTを活用して、ネット上で他者との円滑な対人関係の構築が求められる知識基盤社会においては、情報モラルを指導していく上で社会的スキルの育成を検討していく必要があると考えられる。

ネット上の対人関係に着目した石川 (2014)、石川・平田 (2013) は、ソーシャルネットワーク上のコミュニティ

における他者との関わり方の傾向を探り、良好な信頼関係や相互作用に及ぼす要素として仲間意識の強さを挙げている。さらに、石川（2014）は社会的スキルの違いがソーシャルネットワーク上のコミュニティの他者との相互作用や依存的関わりに影響を及ぼすことを明らかとした。これらの研究においては、自ら発信するソーシャルネットワーク上のコミュニティにおける他者との関わり方に焦点を当てているが、利用者の現状を踏まえた他者との関わり方にも目を向ける必要があると考えられる。SNS（Social Networking Service）は『インターネットを利用して人と人とのコミュニケーションをサポートするサービス』（総務省，2011）であり、インタラクティブなコミュニケーション形態が大きな特徴と捉えることができる。しかし、総務省（2011）においては、SNSの利用の仕方の調査結果として、閲覧と書き込みの両方の利用が55.7%であるのに対し、主に閲覧のみの利用が43.9%であることが報告されている。この結果を踏まえれば、能動的な他者との関わり方だけに留まらず、他者同士がコミュニケーションしている場面を閲覧、傍観する受動的な関わり方についても目を向ける必要があるだろう。

そこで本研究では、SNSを含むソーシャルメディアを利用したネットワーク上のコミュニティ（以下、ネット上のコミュニティ）への関与の違いが当該コミュニティの認知や他者とのつながり^{*1}方にどのような影響を及ぼすか、その傾向を探ることを目的とする。ネット上のコミュニティへの関与の形態は、自らがコミュニケーションの発信者となる場合と、閲覧のみという傍観者として参加している場合を採用し、社会的スキルの違いによる影響を踏まえながら当該コミュニティの認知や他者とのつながり方の傾向を探る。さらに、本研究で得られた知見の情報モラル指導における有用性について考察する。

2 方法

2.1 質問紙

質問紙は以下の3つの内容で構成した。(2)(3)の各項目作成にあたっては、石川（2014）で用いられたメールやSNS利用時における相手（他者）との関わり方についての質問紙や当該研究結果等を参考にした。質問紙には、「ソーシャルメディア」という表現の代わりに、「複数（3名以上）で構成されるネット上のコミュニケーションサービス」と表記した。

- (1)社会的スキル測定の尺度（18項目/菊池，1988）
- (2)自らが発信するソーシャルメディア（発信型SocM）に関する内容
 - (a)該当のソーシャルメディア利用状況と特徴（6項目）
 - (b)該当のソーシャルメディアのコミュニティに対する認知（12項目/項目内容は表2参照）
 - (c)該当のソーシャルメディア利用時における他者とのつながり方（22項目/項目内容は表3参照）
- (3)閲覧のみで自らは発信しないソーシャルメディア（傍観型SocM）に関する内容
 - (a)該当のソーシャルメディア利用状況と特徴（4項目）
 - (b)該当のソーシャルメディアのコミュニティに対する認知（12項目/(2)(b)と同一項目）
 - (c)該当のソーシャルメディア利用時における他者とのつながり方（15項目/(2)(c)と一部重複、項目内容は表3参照）

なお、発信型SocMを利用していない者には、(2)の各項目の代わりに、別項目の回答を求めた。今回はこのうち、(1)社会的スキル（18項目）、(2)(b)発信型SocMのコミュニティに対する認知（12項目）および(c)発信型SocM利用時の他者とのつながり方（22項目）、(3)(b)傍観型SocMのコミュニティに対する認知（12項目）および(c)傍観型SocM利用時の他者とのつながり方（15項目）を分析対象とした。これらはいずれも5件法により回答を求めた。

2.2 対象者・実施時期と方法

情報教育関連の講義科目の受講者である学部生、大学院生178名（男85名、女90名、不明3名/18～34歳）を対象とし、無記名による質問紙調査を授業時間内に実施した。はじめに、性別および年齢について同意しない場合は、無回答であっても構わないこと、および、記入された回答は統計処理を行い、回答用紙は適切に管理・処理する旨を説明した。今回は、発信型SocMの利用者である162名（男80名、女82名、不明2名）を分析対象者とした。

3 結果および考察

3.1 社会的スキルの特徴

社会的スキルの全18項目について合計点を求めた結果、平均値は60.25、標準偏差は9.68であった。また、信頼性係数（クロンバックの α 係数）は $\alpha = .88$ だった。先行研究では、五十嵐（2002）は大学生265名についての調査で $\alpha = .88$ 、石川（2014）は大学生・大学院生175名についての調査で $\alpha = .88$ が報告されており、信頼性の高い尺度であると考えられる。本研究では、社会的スキルの違いに着目し分析するため、社会的スキルの全18項目合計が平均値以上の者を上位群、平均値未満の者を下位群に分類し（表1参照）、社会的スキル要因とした。

表1 社会的スキルの上位群・下位群の各人数（n）および平均・標準偏差（SD）

	n	平均	SD
上位群	86	67.13	5.36
下位群	75	52.41	7.11

3.2 ネット上のコミュニティに対する認知の特徴の比較

発信型SocMと傍観型SocMのコミュニティに対する認知の特徴を比較するために、双方の項目を合わせて因子分析（最尤法、平行分析の結果に基づき3因子を抽出、バリマックス回転、因子得点の推定）を行った。共通性が最も低い1項目を除外して、再度因子分析（最尤法、平行分析の結果に基づき3因子を抽出、バリマックス回転、因子得点の推定）を行った。その結果、第3因子までの累積寄与率は51.08%（第1因子22.09%、第2因子17.32%、第3因子11.67%）だった（表2）。各因子の負荷量が高い項目内容を踏まえ、第1因子は居心地感、第2因子は信頼感、第3因子は平穏感と命名した。第1因子と第2因子を比較すると、双方の因子に比較的高い負荷量を示す項目が複数示された（項目6、7、9）。

表2 ネット上のコミュニティに対する認知の因子構造

項目	I	II	III	共通性
5 このコミュニティは居心地が良い	.79	.30	.21	.75
10 このコミュニティに参加することは楽しい	.77	.22	.12	.66
7 このコミュニティに関わっていると安心する	.58	.54	.16	.65
4 頻繁に発言のやりとりがなされている	.41	.20	-.26	.28
1 このコミュニティでは、自分の欲しい情報が得られやすい	.34	.23	.02	.17
2 このコミュニティは一体感が強い	.26	.72	.03	.58
6 このコミュニティの参加者は信頼できる	.42	.60	.36	.67
9 このコミュニティでは、良い人たちと出会える	.42	.52	.15	.47
11 このコミュニティは問題が少ない	.18	.40	.62	.58
12 このコミュニティは参加者の発言内容に対して寛容だ	.37	.27	.54	.50
3 このコミュニティに関わることで不安に思うことがある	.06	.03	-.55	.30

発信型SocM、傍観型SocMを水準として、関与タイプ要因とした。因子得点を従属変数とし、社会的スキル要因（2水準）と関与タイプ要因（2水準）による2要因分散分析を因子ごとに行った。その結果、第1因子は関与タイプ要因が有意であり（ $F(1,141)=93.95, p<.01$ ）、発信型SocMの方が傍観型SocMよりも有意に居心地感が高かった（図1(a)）。第2因子は関与タイプ要因は有意であり（ $F(1,141)=10.28, p<.01$ ）、発信型SocMの方が傍観型SocMよりも信頼感が高かった（図1(b)）。社会的スキル要因は有意傾向を示し（ $F(1,141)=3.02, p<.10$ ）、上位群の方が下位群よりも信頼感が高かった、第3因子は交互作用が有意だった（ $F(1,141)=4.29, p<.05$ ）。そこでHolm法による多重比較を行ったところ、傍観型SocMにおける社会的スキル要因が有意であり（ $F(1,141)=7.32, p<.05$ ）、上位群の方が下位群よりも有意に平穏感が高かった。また、社会的スキルの下位群における関与タイプ要因が有意傾向であり（ $F(1,64)=2.88, p<.10$ ）、発信型SocMの方が傍観型SocMよりも平穏感が高い傾向を示した（図1(c)）。

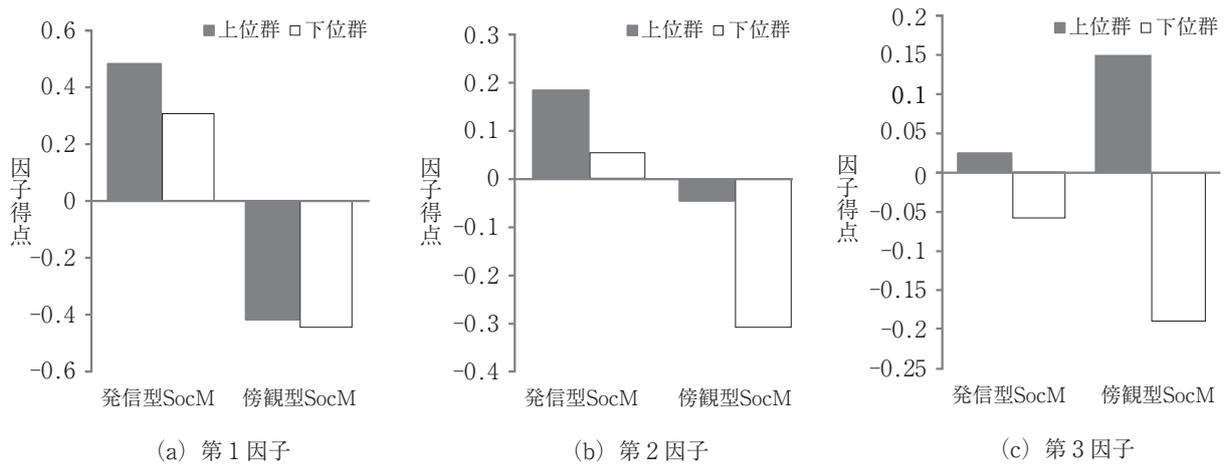


図1 社会的スキル要因と関与タイプ要因の傾向

ところで、標準化された因子得点による結果においては、水準間の差の検証は可能であっても、実際のコミュニティに対する認知の程度は明白ではないため、素点を指標として再検証することとした。各因子の負荷量が.40以上に該当する項目の平均値を因子の傾向を示す指標とした。なお、逆転項目については値を変換した。因子得点と素点平均の各相関係数は、発信型SocMにおいて、第1因子.84、第2因子.89、第3因子.95、傍観型SocMでは第1因子.78、第2因子.89、第3因子.94であった。素点の平均は、因子に対する負荷の高い項目のみを抽出して分析しているため、因子得点を従属変数とした結果とは区別する必要があるが、いずれも強い相関があることが示された。

今回の5件法では、3が「どちらともいえない」というニュートラルな評定であり、3より高い値の場合は肯定的評価、逆に低い場合が否定的評価を意味する。図2に示した通り、発信型SocMにおいては、すべての因子、水準で肯定的評価であるのに対し、傍観型SocMは第3因子の社会的スキルが上位群の者を除いては、すべて否定的評価であることが示された。素点平均を従属変数とし、社会的スキル要因（2水準）と関与タイプ要因（2水準）による2要因分散分析を行った。その結果、第1因子は関与タイプ要因が有意であり ($F(1,143)=99.77, p<.01$)、発信型SocMの方が傍観型SocMよりも有意に居心地感が高かった。第2因子は双方の要因が有意であり、社会的スキル要因は上位群の方が下位群よりも信頼感が高く ($F(1,143)=4.56, p<.05$)、関与タイプ要因は発信型SocMの方が傍観型SocMよりも信頼感が高かった ($F(1,143)=38.51, p<.01$)。第3因子は交互作用が有意だった ($F(1,143)=4.67, p<.05$)。そこでHolm法による多重比較を行ったところ、傍観型SocMにおける社会的スキル要因が有意であり ($F(1,143)=9.08, p<.05$)、上位群の方が下位群よりも平穏感が高かった。また、社会的スキルの下位群における関与タイプ要因が有意であり ($F(1,65)=13.28, p<.10$)、発信型SocMの方が傍観型SocMよりも平穏感が高かった。

ネット上のコミュニティに対する認知の傾向を探る上で、因子得点を従属変数として分析した結果に加え、素点平均を従属変数として分析した「認知の程度」の結果を関連付けて検証することとした。第1因子の居心地感については、発信型SocMの方が傍観型SocMよりも高く、前者が肯定的評価であるのに対し、後者は否定的評価の傾向が示された。当該コミュニティに発信者として関与する場合は、居心地の良さという側面が重要であるのに対し、傍観者として関与する場合は、重視されていないと捉えることができる。第2因子の信頼感については、有意傾向であるものの、社会的スキルの高い者の方が低い者よりもコミュニティに対する信頼感が高く、また、発信型SocMの方が傍観型SocMよりも高い特徴が示された。特に、発信型SocMの方が肯定的評価であるのに対し、傍観型SocMは否定的評価傾向であることにより、コミュニティに対する信頼感の高さが発信する関与では重要視されていると考えられる。逆に、傍観者としての関与であれば、信頼度の高さは当該のコミュニティに対して必ずしも重要ではないと解釈することもできるだろう。第3因子の平穏感については、傍観型SocMにおいて社会的スキルの上位群が肯定的評価であるのに対し、下位群は否定的評価の傾向が示された。傍観者として関与している状況であれば、直接的な問題は生じないと考えられるが、平穏感に否定的評価をしている社会的スキルの低い者の方が、肯定的評価をしている高い者よりも、トラブルに遭遇する可能性があるかと捉えることもできるだろう。

3.3 ソーシャルメディア利用時における他者とのつながり方の特徴の比較

発信型SocMと傍観型SocM利用時における他者とのつながり方の特徴を比較するために、双方の共通項目を抽出した後、合わせて因子分析（最尤法、平行分析の結果に基づき3因子を抽出、バリマックス回転、因子得点の推定）を

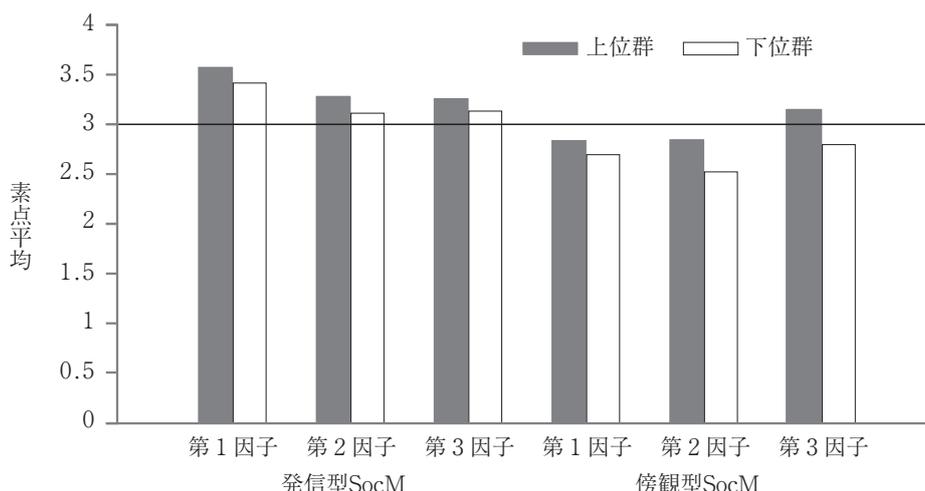


図2 素点平均に基づく因子別社会的スキル要因と関与タイプ要因の認知の傾向

行った。これらの項目のうち、内容的重複の可能性が高いと考えられるものがあったため、共通性の低い方の1項目を除外して、再度、因子分析（最尤法，平行分析の結果に基づき3因子を抽出，バリマックス回転，因子得点の推定）を行った。その結果，第3因子までの累積寄与率は59.32%（第1因子29.34%，第2因子20.27%，第3因子12.18%）だった（表3）。各因子の負荷量が高い項目内容を踏まえ，第1因子は親密性，第2因子は共感性，第3因子は他者理解性と命名した。

発信型SocM，傍観型SocMを水準として，関与タイプ要因とした。因子ごとに因子得点を従属変数とし，社会的スキル要因（2水準）と関与タイプ要因（2水準）による2要因分散分析を行った。その結果，第1因子は関与タイプ要因が有意であり（ $F(1,142)=60.91, p<.01$ ），発信型SocMの方が傍観型SocMよりも有意に親密性が高かった（図3(a)）。第2因子は双方の主効果が有意であり，社会的スキル要因においては上位群の方が下位群よりも共感性が高く（ $F(1,142)=5.53, p<.05$ ），関与タイプ要因では発信型SocMの方が傍観型SocMよりも共感性が高かった（ $F(1,142)=14.26, p<.01$ ）（図3(b)）。第3因子は社会的スキル要因が有意であり（ $F(1,142)=4.85, p<.05$ ），上位群の方が下位群よりも有意に他者理解が高かった（図3(c)）。

ネット上のコミュニティに対する認知の分析と同様に，他者とのつながり方の程度について素点を指標として再検証することとした。各因子の負荷量が.40以上に該当する項目の平均値を因子の傾向を示す指標とした。なお，逆転項目については値を変換した。因子得点と素点平均の各相関係数は，発信型SocMにおいて，第1因子.89，第2因子.93，第3因子-.74，傍観型SocMでは第1因子.92，第2因子.96，第3因子-.70であった。第3因子の負の相関係数は逆転項目の値の変換に依拠するものである。また，第3因子は該当項目が1つのみであったため，他の因子に比べると，相関係数がやや低い値を示しているが，第1，2因子においては強い相関があることが示された。

表3 ソーシャルメディア利用時における他者とのつながり方の因子構造

項目	I	II	III	共通性
10 参加者ともっと親密になりたい	.93	.30	.11	.96
9 参加者ともっと関わりを深めたい	.88	.34	.16	.91
11 参加者と積極的に交流したい	.85	.34	.09	.85
12 このコミュニティに夢中になっている	.47	.35	-.15	.37
1 参加者の発言に共感することが多い	.29	.67	.03	.53
2 参加者の発言に影響されることがある	.22	.67	-.37	.63
4 取り上げられている話題(情報)を参加者と共有している実感がある	.34	.61	.05	.49
8 このコミュニティに対して満足している	.28	.60	.14	.45
6 自分は参加者の発言内容を正しく理解していると思う	.18	.59	.38	.52
5 このコミュニティには真剣に参加している	.38	.57	.15	.49
3 参加者に対して不快に思うことがある	-.06	-.05	-.54	.29

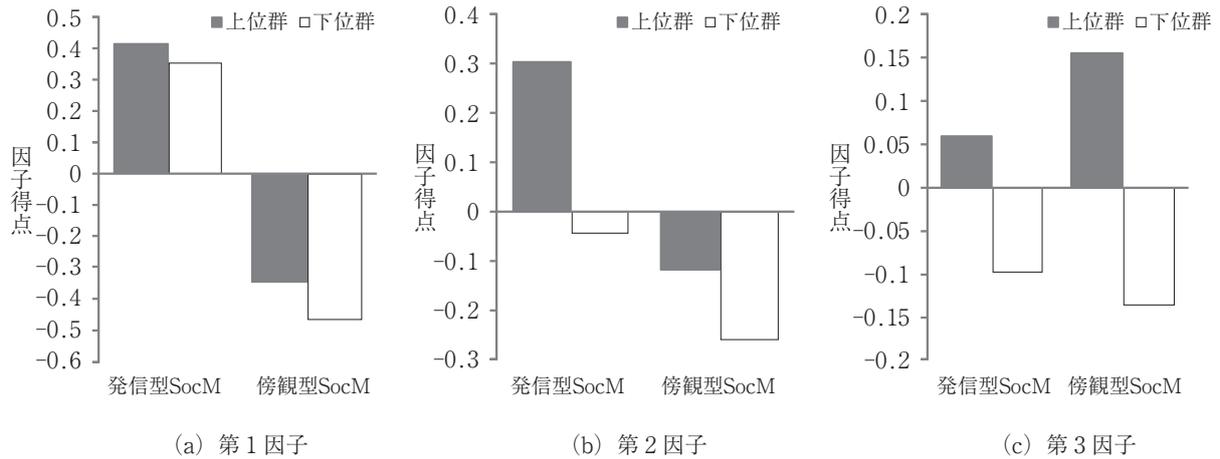


図3 社会的スキル要因と関与タイプ要因の傾向

今回の5件法では、3が「どちらともいえない」というニュートラルな評定であり、それよりも値が高い場合が肯定的評価、逆に低い場合が否定的評価を意味する。図4に示した通り、発信型SocMにおいてはすべての因子、水準で肯定的評価であった。一方、傍観型SocMは第1因子において、否定的評価である傾向が顕著に示された。第2,第3因子は、ほぼニュートラルな評価の傾向が示された。

素点平均を従属変数とし、社会的スキル要因（2水準）と関与タイプ要因（2水準）による2要因分散分析を行った。その結果、第1因子は関与タイプ要因が有意であり ($F(1,144)=77.35, p<.01$)、発信型SocMの方が傍観型SocMよりも有意に親密性が高かった。第2因子は双方の主効果が有意であり、社会的スキル要因においては上位群の方が下位群よりも高く ($F(1,144)=4.92, p<.05$)、関与タイプ要因では発信型SocMの方が傍観型SocMよりも共感性が高かった ($F(1,144)=36.55, p<.01$)。第3因子は主効果、交互作用とも有意ではなかった ($p>.10$)。

ソーシャルメディア利用時における他者とのつながり方の傾向を探る上で、因子得点を従属変数として分析した結果に加え、素点平均を従属変数として分析した「つながり方の程度」の結果を関連付けて検証することとした。第1因子の親密性については、発信型SocMの方が傍観型SocMよりも高く、前者が肯定的評価であるのに対し、後者は否定的評価の傾向が示された。他者との親密性の高さは、発言する上で非常に重要な側面と考えられる。第2因子の共感性は、発信型SocM、傍観型SocMに関わらず、社会的スキルの高い者の方が低い者よりも高い傾向が示されたが、コミュニティにおいて他者とより良くつながるために、共感性が高いことは重要であると考えられる。発信型SocMの方が傍観型SocMよりも共感性が高い点は、自ら能動的に発信できる他者とのつながり方において、受動的なつながり方よりも、より共感できる他者の存在が重要であるのかも知れない。なお、共感性の関わり方の程度は、傍観型SocMもほぼニュートラルな評価であり、他者とのつながりにおいては共感性がある程度必要な側面と捉えることが

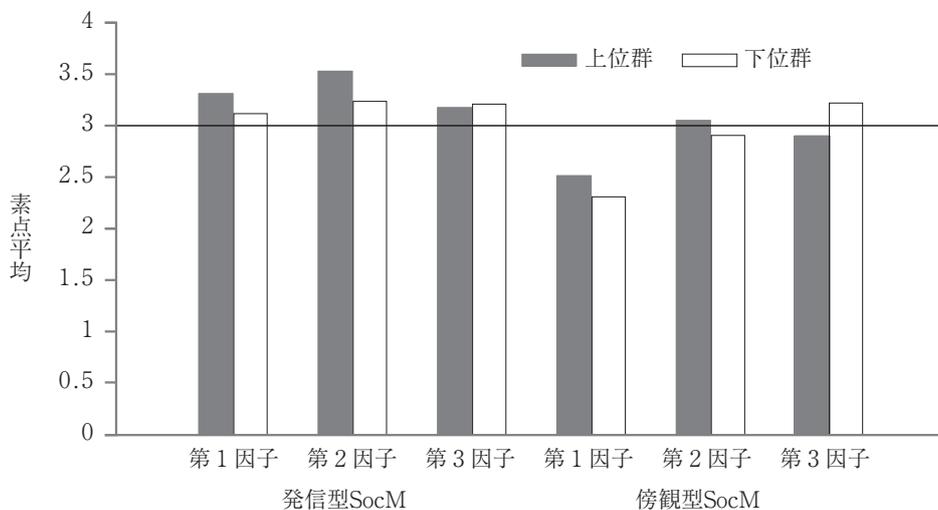


図4 素点平均に基づく因子別ソーシャルメディア利用時における他者とのつながり方傾向

できるだろう。第3因子の他者理解性は、他者とのつながり方がより巧みな社会的スキルの上位群の方が下位群よりも高い傾向を示しており、より良い他者とのつながり方の一つの側面として、他者理解を検討しておくことは重要と考えられる。なお、つながり方の程度に関しては、ニュートラルな評価であり、他者とのつながりにおいては他者を理解することがある程度必要な側面と捉えることができるだろう。

3. 4 総合的考察

発信型SocMでは、自ら発言し、コミュニティの一員として他者と能動的に関わる特徴があり、コミュニティや他者と強いつながりがあると考えられる。一方、傍観型SocMでは、自らは発言せず、コミュニティの他者が発信するものを閲覧するに留まり、いわば受動的に関わる点が特徴であり、コミュニティや他者とはゆるやかなつながりがあると考えられる。こうしたコミュニティへの関与の違いが、コミュニティに対する認知やソーシャルメディア利用時の他者とのつながり方に影響を及ぼした。コミュニティに対する認知においては、全般的な傾向として発信型SocMの方が概ね肯定的な評価であるのに対し、傍観型SocMの多くは否定的評価の傾向を示した。居心地感や信頼感の高さは能動的に関わるコミュニティにおいてより望ましい、あるいは求められている要素と考えられる。他者とのつながり方においては、他者と能動的に関わる場合は受動的な関わり方よりも高い親密性や共感性が重要な側面と考えられる。

今回は対人関係を円滑にするスキル（菊池，2004）である社会的スキルにも焦点を当てたが、今回採用した当該尺度は、たとえば菊池（1993）が「問題解決力」「トラブルの処理」「コミュニケーション能力」の3因子を抽出、石川（2012）が「問題処理スキル」「問題解決・意思決定スキル」「コミュニケーションスキル」「対人関係スキル」「批判的スキル」の5因子を抽出している。今回、ネット上のコミュニティに対する認知については、社会的スキルの高い者が低い者よりもコミュニティに対して信頼感が高い傾向を示した。一方、ソーシャルメディア利用時における他者とのつながり方においては、社会的スキルの高い者の方が、低い者よりも共感性や他者理解が高い傾向を示した。石川（2014）はメールやソーシャルメディア利用時における他者との関わり方において、社会的スキルの高い者の方が、低い者よりも他者との円滑で良好な関わり方やそれに伴う肯定的な評価がなされていると指摘しているが、今回の結果も同様の傾向が示されたことと捉えることができる。共感性や他者理解は、相手とのより良い能動的なつながりにおいて、重要な要素と考えられる。さらに、コミュニティに対する認知は、コミュニティを構成している他者と関わる上で密接に関係した認知と捉えることができるため、社会的スキルの違いによって差が見られたという点は注目すべきと考えられる。すなわち、社会的スキルの高い者の方が低い者よりも信頼感や平穏感が高い傾向を示した結果は、コミュニティに対する認知であっても、他者とより良くつながるためには信頼感や平穏感が重要な側面であることを示唆するものと捉えることができる。

デジタルネイティブ世代の児童生徒が、ネット上のコミュニティで他者とつながることは、今後ますます増えていくであろう。石川（2013）は情報モラル教育において社会的スキルに目を向けていくことの重要性を指摘したが、ソーシャルメディアにおいて、より良好な他者とのつながり方を実現するためにも、今回の結果は情報モラルを指導していく上で有用な知見であると考えられる。社会的スキルの側面においては、高い者の認知や他者とのつながり方を知ることで、ネット上でのより円滑な対人関係を構築することができる可能性がある。また、発信型ソーシャルメディア、傍観型ソーシャルメディアという、関与の違いによって、コミュニティの認知や他者とのつながり方の相違がある点を知ることで、それぞれのコミュニティ上で適切な他者とのつながり方を検討することもできるだろう。すなわち、社会的スキルを育成することは、ICTを活用して多様なネット上のコミュニティでより良好な他者とのつながり方、円滑な対人関係の構築改善につながる可能性があり、その意味においても、情報モラル教育の指導において重要であると考えられる。

4 おわりに

本研究では、ソーシャルメディアを利用したネットワーク上のコミュニティへの関与形態の違いがコミュニティに対する認知や他者とのつながり方にどのような影響を及ぼすか、その傾向を探った。ネット上のコミュニティの関与タイプには、自らが発信者となる能動的な発信型と、閲覧のみという傍観型の2つのタイプに焦点を当て、さらに、社会的スキルの違いによる影響にも着目した。その結果、以下の傾向が示された。

(1) ソーシャルメディアのコミュニティに対する認知については、発信型コミュニティの方が傍観型コミュニティよりも居心地感や信頼感が高かった。前者のコミュニティが肯定的評価である一方で、後者は否定的評価の傾向が示

された。また、傍観型コミュニティにおいて、社会的スキルの高い者の方が低い者よりもコミュニティに対する平穩感の認知が高い傾向が示された。

(2) ソーシャルメディア利用時における他者とのつながり方については、発信型ソーシャルメディアの方が傍観型ソーシャルメディアよりも、親密性、共感性が高かった。親密性については、前者のソーシャルメディアが肯定的評価であるのに対し、後者は否定的評価であることが示された。また、社会的スキルの高い者の方が低い者よりも共感性や他者理解性が高かった。

さらに、社会的スキルの高い者の認知や他者とのつながり方を知ることで、ネット上でのより円滑な対人関係を構築することができる可能性があるという点を踏まえ、本研究の知見が情報モラル教育の指導に有用であることが検討された。

今回の調査においては、発信型ソーシャルメディアと傍観型ソーシャルメディアに対する認知や他者とのつながり方の違いを示すことはできたものの、要因、因果関係について探るには至らなかった。発信型と傍観型の差は何に起因するのか、その際、社会的スキルはどの程度影響を及ぼしているかなどについて探る必要があるだろう。また、時系列の変化の比較に焦点を当て、ネット上の他者とのつながり方の傾向を探ることも重要と考えられる。今回は発信型と傍観型という関与の違いに着目したが、サービス形態の違いやソーシャルメディアを構成しているメンバーの違いなど、ソーシャルメディアはさまざまな特性を持っている。このような特性をどのような切り口から比較するかについても検討の余地はあるだろう。今回の知見を踏まえて、さまざまな特性に着目してソーシャルメディアに対する認知や他者とのつながり方の傾向をさらに探っていくことが今後の課題である。

注

※1 ネット上の他者との関わり方については、「つながり」という表現が用いられることがある。たとえば、小林(2007)はケータイの電源を常時入れておく傾向やメール受信時にすぐに返信する傾向やメールの送信相手に即時応答を期待する傾向等について、相手との「つながっていたい」という心情の現れと述べている。本研究では、他者との能動的、受動的な「つながり」という表現を「関わり」と同様の意味として用いる。

文献

- 相川充 (2010) 対人関係の開始と維持 (6章第1節). 展望 現代の社会心理学2 コミュニケーションと対人関係 [相川充・高井次郎編著], 誠心書房, 98-109.
- 五十嵐祐 (2002) CMCの社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性. 社会心理学研究, 17(2), 97-108.
- 石川真 (2012) 感情表現を伝えるテキストメッセージの特徴に関する研究. 上越教育大学研究紀要, 31, 9-17.
- 石川真 (2013) 親密さの違いによるメールコミュニケーションの振る舞いに関する研究. 上越教育大学研究紀要, 32, 25-34.
- 石川真 (2014) 社会的スキルの違いがネットワーク上の他者との関わり方に及ぼす影響. 上越教育大学研究紀要, 33, 11-19.
- 石川真・平田乃美 (2013) ソーシャルネットワーク上のコミュニティにおける他者との関わり方の傾向. 日本社会心理学会第54回大会発表論文集, 421.
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する, 川島書店.
- 菊池章夫 (2004) KiSS-18研究ノート. 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 6 (2), 41-51.
- 小林哲生 (2007) ケータイ使用が生み出す心理 (第3章). モバイル社会の現状と行方 [小林・天野・正高著], NTT出版, 56-93.
- Prensky, M. (2001) Digital Natives, Digital Immigrants. On the Horizon, 9(5), 1-6.
- Segrin, C. and Taylor, M. (2007) Positive interpersonal relationships mediate the association between social skills and psychological well-being. Personality and individual differences, 43, 637-646.
- 総務省 (2011) 次世代ICT社会の実現がもたらす可能性に関する調査研究報告書.
http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/h23_05_houkoku.pdf (検索日2014年9月24日)
- 戸部秀之・竹内一夫・堀田美枝子 (2010) 児童生徒のインターネット依存傾向とメンタルヘルス, 心理・社会的問題性との関連. 学校保健研究52(2), 125-134.

付記

本研究は、科研費(基盤研究(C))「青少年のネットワーク環境における社会的なつながりの認識に関する基礎的研究(課題番号23601004)」の助成を受けて行ったものである。

A study of relationship and cognition in the social media community under the different participating type

Makoto ISHIKAWA *

ABSTRACT

The purpose of this study is to clarify the influence of the two participating types of cognition and relationship in the social media community. Participating types focused on the active speaker and the passive onlooker. Effects on social skills for the cognition and relationship were also analyzed. The results were as follows:

(1) It was shown on the cognition in the social media community that the active participating type is more comfortable and reliable than the passive participating type. The former type was positive tendency, while the latter type was negative. The higher group in social skills was more peaceful than a lower group in the only passive participating type.

(2) It was shown in the relationship in the social media community that the active participating type is more intimate and empathic than the passive participating type. The former type was a positive tendency in the intimate factor, while the latter type was negative. The higher group in social skills was more empathic and understood other people well than a lower group.

* School Education